

〔書評〕

奥村三雄著

『平曲譜本の研究』

金田一 春彦

一

「平曲譜本の研究」と題するこの本は、平曲譜本に現れる個々の語について、そこに注記されている墨譜によって近世のアクセントを明らかにする研究で、要するに、その内容は、国語のアクセント史の研究である。その点では、私が以前書いた『四座講式の研究』が楽曲としての四座講式の音楽の研究を意図するものではなくて、それによる国語のアクセント史の一こまを明らかにしようとしたものと同じ行き方である。同類の本が出来たことに対し、親愛の情を禁じ得ない。以下、先輩面をし、兄貴風を吹かして、妄評を書くことをお許し願いたい。

二

私は、評者として、著者、奥村氏のこの本に対し、本当によくおやりになったと感心した。というのは、何より、私が『四座講式』を扱った場合は、まず、本文の分量が少い。平曲の譜本はその数十倍もある。また、譜本の種類も『四座講式』の方は単純で、大

く言って、高野山系統のものと、西大寺系統のものとの二つしかない。そのうち、西大寺系統のものは、大慈院本という本一つしか見付からなかったので、譜本のほとんど全部は同じような種類のものということになり、その比較は簡単なものだった。

が、平曲の譜本は、著名な荻野校編の『平家正節』があつて、それだけでも、異本がたくさんあるのに、それ以前の譜本として、『平家吟譜』とか、横井氏蔵の『平語』とか、いろいろのものがあり、また、もっと早く、それらと別れた、波多野流の譜本というものがある。こういうものまで、著者は逐一目を通しておられる。その努力は並大抵ではなく、評者のものとは比倫を絶する壮大な研究だった。

もう一つ大変だったろうとお察しすることは、評者は以前平曲の譜本の研究によるアクセント史の研究をやるとか、やったとか、公言している。そういうことに関して、著者は精神的な負担があつたのではないかと思う。しかし、評者がやったと言っても、それは譜本はごく一部の譜本だけしか見ておらず、それも限られた曲節についてだけしか扱っていない粗稿を書き上げただけだった。その後、

『平家正節』の定本を作る前の校本ともいふべき、京都大学の『平曲正節』やら、今ある『平家正節』の諸本の祖本と言われる『尾崎家本・平家正節』が出て来たりしたので、初めから書き直さなければと思つていたところだった。そこへ持つて来て、評者は、平曲に反映しているアクセントよりも、平曲そのものがおもしろくなって来てしまい、前の原稿を書き直す意欲もなくなりかけていた。だから、著者は評者に遠慮される必要は何もなかったのである。

一般に自分が何か新しい研究を発表しようと思つている矢先、同じ題目を扱った、あまり大したこともない研究が出ることは、おもしろくないものである。その欠陥をあげつらうのも、おとな気ないし、と言つて、そこに発表されているのが先だからということ、自分も気付いていることを一々その本から引用するのも気が進まない。何とも中々腹のものである。

が、それが、発表しようとしていたより遙かにりっぱな研究である場合は事情がちがう。自分がつまらない研究を発表して恥をかかなくてよかつたと思ひ、また、自分に代つて研究を進めてくれたことに対する感謝の気持ちがおこつてくる。著者のこの大部な本は、評者にとつて正しくそういう種類の発表で、このようなりっぱな業績を立てられたことを、歪を満たして祝福したいと思つた。

三

著者は、前に述べたことを繰返すが、この本で専ら平曲の譜本の譜をたよりに、近世のアクセントを推考しておられ、そのために夥しい数の譜本を見ておられる。この本の第一篇はその論考だ。以前、平曲の譜本をよく見ていた人には、愛知県立女子大学の渥美か

おる女史があつた。不幸にして女史は昭和五十二年十二月に急逝された。奥村氏はその衣鉢を継ぎ、女史に成り変つてこの方面の研究に精進しておられ、まことに心強いことである。

奥村氏は、この方面の業績としては、すでに臨川書店から『平曲正節』の複製本を出され、また、渥美女史と協力して『尾崎家本・平家正節』の複製本を公刊しておられる。先に触れた本だ。今、この『平家正節の研究』を読んでも、『教育大本平家物語』田辺尚雄氏旧蔵『平家書』など、見るべき本は軒並み見しておられる。ことに山口県立図書館にある『奏音曲鈔』というような本まで見ておられるが、この本は波多野流譜本の源流の本と見られるもので、渥美女史も知つておられなかつた。この発見、紹介の功は大きい。

著者のこの新書の功績の一部は、そういう譜本の涉獵ということにあり、評者など新たに教えられたところが多大である。評者は田辺尚雄氏旧蔵の『平家書』というものを、最も古い譜本で室町末期のものかと思つていたが、著者は、その譜のつき方に、著者の公選上り式が散見することから教育大本よりも新しいものだろうと断ぜられた(五四―六)。これには、評者はグウの音も出ないところで、今後、この考えに従ふことにする。また、『教育大本平家物語』という譜本の譜と『平家正節』の譜とを比較して、「雲」とか「然様」とかいう語について、そこに反映しているアクセントのちがいを考察し、教育大本の方が古い時代のアクセントを伝えていることを指適しておられる(五七―八)。これなど譜本を精細に調べられたればこそその発見で、敬意を表する。それから、筆者がひとり虎の子のように慈しんでいた『東大本・平家正節』も、一連の諸写本の中に出して比較してみると、必ずしもよい本ではないことを一〇六―

し〇八ペの間で、縷々と説かれておられる。遼東の家の類であったことを教えられたが、この点も筆者としては頭を切り変えるほかはない。

また『尾崎家本・平家正節』に対して、著者はこれを現存諸本の祖本とすることに疑いをもっておられるように伺われる(一一〇ペ)ことは嬉しいことである。筆者は、この本は平曲にあまり心得のない人が、適当に写した本で、凡そ祖本というような代物ではないと述べたところ、渥美女史は口をきめて評者の非を鳴らされた。今、この著者のこのあたりの記述を、渥美女史が生きていて読まれたら、どのように思われるか、と感慨にたえない(この項詳しくは『芸能』昭和52年1月号・5月号および53年4月号を参照されたい)。

四

ところで著者のこの新著の精髓は、そういう譜本の紹介・解説・評価に終始するのではない。本筋はこの本の第二編に述べられた、近世のアクセントの解明にある。評者も平曲の譜本を資料として近世のアクセントを明らかにしようとしたことがあったが、その時は『平家正節』の一写本、東大本だけを資料とし、また本文のうち「素声」と呼ばれる曲節の部分と、せいぜい「口説」と呼ばれる曲節の部分ぐらしか扱わなかった。これに対して著者は、全譜本の全曲節の譜を資料とされる。この物量作戦は見事に功を奏し、従来知られていなかった、きわめて多くのアクセントに関する事実を明らかにしておられる。

この本の二六二ペから二七五ペに亘っては、夥しい数の語彙のアクセントが掲載されているが、ここには奥村氏によってはじめて報

告されたものに満ち満ちている。評者が先に担当した小学館の『日本国語大辞典』の江戸時代のアクセント表記などは、これによって訂正・増補されるところが随分あるはずだ。ことに、そこには多くの漢語が含まれているが、漢語のアクセントの歴史は、評者も一般諸家も軽んじていたところだった。服部四郎氏は近ごろ東西両アクセントのちがいが出来たのは、漢語が日本に輸入されたより以前だろうとするお考を発表されたが、この新説の可否を吟味する上にも重要な資料となるにちがいない。

それから、平曲譜本は『平家物語』という文芸作品全文に亘って曲付けしたもので、その全体がアクセントを反映するのであるから、『類聚名義抄』のような文献とちがいが、アクセントの知られるのは、名詞や動詞の原形にとどまらず用言の各活用形とか、助詞、助動詞とかに及び、教えてくれるところが多大のはずである。この新著によってそういう分野の近世のアクセントの内容がいろいろ明らかになったことはこの本の大きな手柄である。

さて、著者は、平曲の譜本をどのように活用してアクセント史の資料としたか、ということであるが、著者は『平家正節』を中心にすえ、そこに記載されている墨譜を、(a)高く唱えられる拍に用いられる譜と、(b)低く唱えられる拍に用いられる譜と、(c)両様に用いられる譜とに分類された。そうしてそれを基として、この語には第一拍に(a)、第二拍に(b)の譜がついているから、この語は●○型のアクセントを表わすものであると推定してゆかれる。

この場合、著者は、その語が「口説」という曲節に現れようと「中音」三三重」という曲節に現れようと無差別に強行しておられる。評者はこれに対し果してそれで正しい結果が得られるかどうか

か、不安を感じざるを得なかった。すべての曲節の旋律がアクセントを忠実に反映しているとは思われないが、著者は特に楽曲としての平曲の旋律を明らかにしようとはしておられない。著者の言われるように、「本稿の如きねらいでは、現行平曲よりも譜本類の方が遙かに有意義」(一二ペ)だと言つて間違ひではない。が、しかし、それは現行の平曲が変化した姿であるからそうなるので、そうだとしても、それらをもととして、譜本が出来たころの平曲の旋律を推定してみることは必要なのではないか？

しかし、この著者は、著者の方法を用いて、個々の語のアクセントについて、批評をさし挟む余地のない、ほぼ完全な成果を得ておられることは特筆しなければならぬ。それは、著者はまことに賢明な方法で、事を運んでおられるためである。すなわち、著者はまず「素声」とか「口説」とか、アクセントを多く反映していそうな曲節をえらび、そこで《上》とか《コ上》とか、高低をはっきり示す譜にたよつて個々の語のアクセントを推定し、そののちに、その語が他の曲節に用いられる場合、どのような他の譜で表記されているかを検討し、それをもととして、一つ一つの譜の性格を定めるといふ巧妙な方法を採用しておられる。例えば、この新著に次のような記述があるが、強い結論を急がない著者の態度に、慎しんで頭を下げる。

(a)《ハリ》《大回シ》《入り》という譜の連続は、場所により●●○型と●○○型という二種類のアクセントを反映している(三一二ペ)。

(b)《小回シ》と《ハリ》の連続の譜は、●●型のアクセントと●●●型のアクセントの両方を反映する(三〇七ペ)。

これらはいずれもおもしろい発見で、(b)の場合は、「位」のような語を、高起式の譜のほかに低起式の譜でも表記していることがあるという事実(三四三ペ)と揆を一にするもので、平曲の旋律が単語のアクセントを破壊する場合の一つの形式上の特色であろう。

もっとも強いてないものねだりをするならば、著者が平曲の旋律そのものを弁えていたら、もっとしっかりした結論が出たろうと思われるところがないでもない。例えば、《オサエ》と呼ぶ譜は低い音を表わす譜であり、《大回シ》や《小回シ》と呼ぶ譜は高い音を表わす譜とされる。これで大体よい。しかし、《オサエ》のあとに《大回シ》や《小回シ》が来た場合は、意外にも●●○型のアクセントを反映する。著者は明敏にもこの事実に気付いておられる(一一五ペ)が、なぜそうなるかは説明しておられない。

評者に言わせて頂くならば、これは、《オサエ》という譜は、次に来る譜との関係を問題にせず、直前の音の高さに対して低いという意味を表わす譜であり、一方次の《大回シ》《小回シ》という語は特定の高さの旋律を表わす譜であるところから、このような結果になると説明する。

また時には、もし著者が資料として尾崎家本ではなく、よい譜本を見られたら、もっと自然な解釈ができるだろうと思われる個所もある。例えば、《小回シ》と《ウキ》が連続すると《小回シ》が低くなる事実を例外だとしておられる(三〇七ペ)が、この《ウキ》という譜は、東大本などでは多く《ウキの上》という譜が付いている。それならば《小回シ》が低くなって当り前である。尾崎家本で、ただの《ウキ》に表記しているのは不完全である。

しかし、そういうことはあつても、この新著の二六二―二八八

べに亘って著者が示された、尨大な数量の単語についての近世のアクセントの推定の結果は、そのまま従ってよいと思われる。このことは、まことに慶賀すべきことである。

五

次に、この新著について注意すべき点は、題名としては『平曲譜本の研究』であるが、著者はそこに扱われている文献資料を遙かに越えて、中世・近世における多くの他の文献資料をも祖上に載せ、活用していることである。そのために、この本は、評者の書いていた近世中期のアクセント史の研究にとどまらず、中世・近世という長い時期のアクセント史の研究であり、他の文献の批判や、他の文献によって明らかにし得た史的事実も、盛んに報告されている点に壯観である。

例えば、例の室町、江戸初期ごろのアクセント資料として著名な『補忘記』の扱いであるが、『平家正節』などよりもっと新しい時代のアクセントをも反映しているようだとこの指摘は感心した。たしかに「舟の」というような形では、『補忘記』の方が反って新しい形を見せているというお考えなど従わざるをえない。

著者はまた、秋永一枝氏が報告された、『古今集・声点本』の声点を活用して、鎌倉時代のアクセントをも明らかにしようとしておられる。ことに、助詞・助動詞のアクセントのあたりには、そういった考察が詳細に行なわれているが、このあたりは資料の扱いに精密さを欠くところがあった。秋永氏の発表を待ってから考察を進めた方がよかったように思う。たとえば、四六五ペに、『天恵本』という本には、否定の助詞「で」が例外の形をとっているとして引か

れているが、この本は、秋永氏は室町時代の写本と断っておられるではないか。

しかし、一方、評者が以前に発表した『四座講式の研究』での考え方の足りなかったことを指摘しておられるところは見事である。

例えば、

(1) 「受く」のような動詞の已然形「受くれ」という形のアクセントについて、評者は、○●○型だろうと推定したが、著者は已然形が二拍の動詞、四拍の動詞への類推から考えて、○●●型だろうと推定される(三八八ペ)。

(2) 「申し」や「香し」の類の終止形のアクセントを、評者は●●●型、●●●●型と考えていたが、著者は●●●●●型、●●●●●●型か、あるいは●●●●●●●●●●型ではなかったかと言われる(四〇八ペ・四九〇ペ)。

(3) 助動詞「たり」は、評者は、●●○型、●●●●型、○●●型につくが、○●●型につかないと推定したが、著者は正しくは○●●●型と●●●●●●●●●●型につくとすべきだと言われる(五〇七ペ)。

以上の点はいずれも、著者が言われるとおりで、評者として一言もない。慎しんで新説により、前考を訂正する。

そういうわけで評者は、この著者のアクセント史研究に教えられるところの大きいことを讃えざるを得ないが、何分大きな範囲を扱う研究なので時に意見を異にする点があっても、自然であろう。意見を異にする最も大きな点は、評者は、△口説▽とか△中音▽とか△折声▽とかいう曲節により、そこに反映するアクセントがちがった時代のものではないかと思うことである。この考えは何度か述べたことではあるが、△折声▽は、南北朝時代のアクセントを、△中

音 \searrow や多くの曲節は室町時代から江戸時代のはじめのアクセントを反映し、 \wedge 素声 \searrow や \wedge 口説 \searrow は江戸中期のアクセントを反映しているとする（この項、詳しくは『音声学会会報』第九九号・第一〇一号の小稿を参照）。

一般に、南北朝時代・室町時代・江戸中期という時代の流れに依りて、京都方言のアクセントは次のように変化したということ、これは、他の文献によっても大体認めてよいことと思う。

南北朝 室町 江戸中期

語例、「命」

●○○↓○○●○○○

語例、「誠」

○○●●○○○○○○

一方「命」の類の単語は、 \wedge 折声 \searrow のはじめの部分と \wedge 中音 \searrow 素声 \searrow とによって、●○○型と○○○型という、ちがった音調を反映しているような譜がついており、また「誠」の類の単語が \wedge 折声 \searrow のはじめの部分、 \wedge 中音 \searrow と \wedge 素声 \searrow とによって、○○●型と○○○型という、ちがった音調を反映しているような譜がついているという傾向、これは著者も認めておられるようである（三三五）。

（三三六、四行に、「御前に」を \wedge 口説 \searrow の中で○○●●型を反映する表記があるとされるが、これは「おんまへに」と読むもので、○○●●型を反映していると思われるのではない）

著者はそれをなぜ新著のように時代による変化と認められないか。まず、「誠」の類の語の○○●型と○○○型との変化については、これは、音声的な変化であって、音韻的な変化ではないと認められることによる。そういう考え方も成り立つとは思いますが、評者は《高》と《低》を調素という音韻調上の単位と見るので、この二つは音韻論的にちがうものと見ることになる。広く方言と見渡すと、

京都・大阪方言ではマコトニ型であるのに対して、徳島や和歌山県竜神村の方言ではマコトニ型であり、和歌山県田辺市や高知の市方言ではマコトニ型というような、明瞭な対立がある。このような例もあることから、○○●型、○○○型、○○○型という対立は三つのちがった時代のアクセントをそれぞれ反映すると見た方がいいのではなからうか。

次に、 \wedge 折声 \searrow における「命」の類の語については、(1)南北朝時代に○○○型と推定される語も \wedge 折声 \searrow には○○●型を反映する譜がつけられていること、(2) \wedge 折声 \searrow といっても、はじめの部分を除いては、譜のつき方が \wedge 中音 \searrow などと同じであることを論拠とされるようだ。

(2)のことについては評者の前の小稿での言葉が足りなかった。評者の問題にしていた \wedge 折声 \searrow は、はじめの《上》《甲》の譜が続いて現れる部分だけだった。ここは、あとの部分とちがって、一音一音声を長く引いて唱えるところで、 \wedge 折声 \searrow という名前も、ここから出たものであるので、評者が \wedge 折声 \searrow と呼んだのは、この部分に限ったつもりであった。そこで、そのはじめの部分であるが、この部分には、たしかに○○○型の語も、○○●型の語も、無差別に○○○型という節を思わせる譜がついている。ここは、評者としては、南北朝時代以来の伝統を受け継いでいるうちに、 \wedge 折声 \searrow では自分たちが○○○型に発音している語を○○●調に唱えるという考えが強く働いた。実は○○○型の語は○○○調に唱えるべきであったが、○○○型の語のかなりのものを○○●調に唱えることが強く印象付けられたために、無差別に○○●調に唱えるようになったもので、○○●調という高低の節そのものは、南北朝時代のアクセントを反

映していると解する。つまり「折声」の部分アクセント史の上に利用する場合、そこに「調」に表記されている語を、全部「型」の例と解せよというわけではない。そのうちの一部（実際は大部分であろう）を「型」の語彙と解せよと言いたいのである。

評者が思うに、一般に盲人の間に伝えられる芸能は、伝統を守る傾向がある面では弱い、ある面では強い。「素声」や「口説」のような、言葉で語る部分や、あまり音楽的な旋律をつけずに唱える部分には、知らず知らず最も新しい時代のアクセントが反映してしまう。が、「中音」や「三重」ともなると、より音楽的な曲節なので、前代から伝えてくる旋律をそのまま伝えていくのではない

か。そして「折声」という曲節は、聖賢の言葉や宗教的な内容について語る部分であるので、近代平曲の始祖、明石検校の旋律をそのまま語り伝えようとしている、そのために南北朝時代のアクセントを反映している、そう考えてよいのではなからうか、そう考えなければ、「折声」という旋律は解釈がつかないと思う。

「折声」にこんな例があることも注意される。「紅葉」の章であるが、「堯の代の民は堯の心の直なるを以て」という部分がある。ここに「堯」が二度出てくるが前の「堯」は、「上上中」、あとの

「堯」は「上上」と節付けされている。なぜこうなっているのか。思うに「堯」は鎌倉時代のアクセントでは、低平の「型」であったが「堯の代」の方は「型」であったらう。（尾崎家本の「代」に「上」の譜が二つ二つしているのにおかしい、『平曲正節』や東大本のように「上」一つの方がよい。）そして「堯の心」の方は「型」型だったらう。ところが南北朝時代に「の」前にある「の」拍は、直前の「の」一つを残してそれ以外ものは、すべて「変

化した、そこで「堯の代」の方は「型」となり、「堯の心」の方は「型」となった。そういうわけで同じ「堯の」という言葉が同じ行の中で「型」と「型」との二様になっている。このような例は、ほかの曲節にはないと思うが、「折声」がやましく前代の旋律を伝えようという努力があったればこそで、それだけ「折声」の初めの部分は尊重されていたのではなからうか。

それから、また奥村氏のこの著書では、一つの単語の場合のアクセントと複合語や熟語の一部になった場合のアクセントとを一つに扱う傾向があるように思う。

たとえば六〇四に「鳴り」が「型」として現れている形とか「譲り」が「型」として現れている形を、例外形として扱っているが、この場合、「長鳴り」とか「位譲り」とかは別の一語と見るべきである。このあたり、著者の若い助手の人がカードに取った時の不注意によるものであろう。また、五二七には、「限り」とか、「名残」とかという語の譜を通して、「折声」には新しい型が反映しているとされるが、そこにあがっている例は「限りなし」とか「名残なし」とかいう形のものが多い。このような慣用句の場合は、普通の名詞の場合とはちがったアクセントになることがあるのではないだろうか。三二八の「目の前」の例、三三三の「案の如く」の例も、無条件に「目の」の例、「案の」の例とするのは控えた方がいいと思う。五一六に「突かう」について「型」を反映する譜が表記されているのに対して、「む」↓「う」という語形変化に伴い、伝統的なアクセントの型が崩れたように考えておられるが、これはすべて「突かう」という、特殊な形であったために崩れたものと解する。

六

著者は第二篇第八章で、それまでの考察全体をまとめておられるが、ここは有終の美をなす章で、もし読者がこの新著の成果を簡単に知ろうとされるならば、この章を読まれることをお勧めする。五七六ページ以下における漢語のアクセントの考察など見事で、著者はこれによって漢語の輸入は東西両アクセントの分離以前だという説をたてておられるが、これなど、動かしようがないように見えるが、如何であるうか。

「アクセントから語彙論へ」の章では、アクセントによる語源研究に触れておられるが、「らむ」の語源は「あらむ」であろうという考説などおもしろい。また、漢語のアクセントの中で、その漢語の型からの、それが日常的な語であったかどうかという判定も、有用である。

最後の第九章の発音注記の研究は、アクセントから離れて、平曲の譜本における清濁の注記による語音の考察に触れているが、たしかに著者のように多くの譜本を渉猟すれば、このようなことについても多くの発見があるはずである。評者が以前岩波版『日本古典大系』の『平家物語』(上)(下)に試みた清濁の注記など、訂正すべき部分がたくさんありそうで、これは改めて勉強させていただく。漢語のツ入声が、ア行音とかラ行音の前ではツメル音として発音された傾向の指摘も貴重であった。

要するに、この本は著者の多年に渡る平曲譜本の研究、ことにアクセント史の資料としての研究をまとめたもので、まことに有意義なものであった。著者はこれまで数多くのこの分野の論文を雑誌そ

の他に発表して来られたが、今度このような一冊の本になったことは、利用にはなはだ便利なものになったことで、学界のためにも実に喜ばしいことだった。

今後アクセント史に関心をもつ人々には、是非参照しなければいけない重要な文献として重きをなすこと確実である。

著者の筆硯、ますます隆盛ならんことを祈って、妄評の筆をおく。

(昭和五十六年五月二十日発行 桜楓社刊 A5判 七八〇ページ 定価三八〇〇円)

——上智大学教授——